

A47/27

早期英語教育を受けてきた子どもの 実態及び中学校英語教育の対応

小 関 晴 彦 (聖ウルスラ学院英智小学校・中学校)

はじめに

平成23年度より小学校5、6年生で英語の授業が必修になることを受けて、当然中学校の教育でもそれに応じた教育を行っていかねばならないことは多くの中学校・高等学校英語教員が認識していることであろう。中学校に入学した時点ですでに何年も学習している生徒が多くいることは現実問題として普通のことになりつつあり、研究者が所属する聖ウルスラ学院英智小中学校でも1年生～6年生まで英語教育が行われている。

そこで小学校からの早期英語教育を受け、中学校での英語の授業をどのように変えていくべきかを本校中学1年生を研究対象とし考察した。

1 早期英語教育を受けてきた生徒の実態

まず本論に入る前に小学校時代の英語学習についての実態把握が必要であると考え、中学1年生全員を対象に4月の段階でアンケートをとった。(それまで学習経験のない生徒は小学校時代に関する質問には無回答とした。) そのアンケートから見えてくることは以下の通りである。

メリット

- ・挨拶、自己紹介、日付や曜日を言うなどの簡単な会話がしっかりできている。
- ・好きな教科や食べるものを聞くと、理由まで答えることができる。
- ・英語を話すことについて抵抗のない生徒が多く、言語活動が行いやすい。以前は英語を話すことが恥ずかしかったり、間違ふことを恐れて言わない生徒が必ずおり、言語活動が成立しない場合が多かった。
- ・発音が上手でカタカナで覚えようとする生徒が少なくなってきた。[th],[f],[v],[r],[l]などの日本人にとっては発音しづらい音も表現できている生徒が多い。
- ・英語を聞くことに慣れており、音がしっかりと文字にされれば長文の問題の力も向上すると予想される。など

デメリット

- ・耳で英語を聞いてきたことにより、文法的な知識を体系化できていない。
- ・自分は英語ができるという変なプライドを持っている生徒がおり、新しいことをなかなか吸収できない、生徒自身がわかっているつもりでいても、テストを行ったり、言語活動をすると、実際にはわかっていることがある。
- ・ゲームや歌などに対して、新鮮味を感じない。典型的なゲームであるビンゴやカルタなどは何十回もしてきているので、それで興味関心を引くことはあまり期待できない。など

2 本校小学校課程卒業生と公立小学校卒業生の比較

本校に入学してくる生徒には大きく分けて2通りある。小学校で6年間英語に触れてきた本校小学校課程卒業生と公立小学校課程卒業生である。それら両者の学力を比較するため、次のアンケート及び学力調査を4月の中学校入学時点と、入学以後(8月、11月)に行った。

4月に行ったアンケート及び学力試験の結果、英語を聞いたり、話すことに抵抗がある生徒の割合は数年前と比較すると少なくなっているようだ。特に本校小学校課程卒業生においてはそれらがほとんど見られず、小学校低学年から英語を学んだ方が抵抗感はないようだ。

学力試験の分析の結果、全ての分野において本校小学校課程卒業生の正答率が高かった。小学校での授業は主に話す、聞くということに主眼を置いて行われているためそれらの正答率が高いのはわかるが、それ以外の分野でも高いということはそれらが他の分野に大きく影響していると理解できる。ただし音声を正確に文字化できていないことが当然あるため、中学校では文字と音声と一体化させる指導が必要である。

8月、11月の学力試験の結果より、これまでの英語学習量が多い本校小学校課程卒業生の方が公立小学校卒業

生よりも平均点が高いのがわかった。しかし時が経つにつれて両者の差は少しずつなくなっていることも見えた。本校の現状では、本校小学校課程を卒業した生徒の数が公立小学校を卒業した生徒の数よりも圧倒的に少ないため両者が同じ授業を受けている。つまり本校小学校課程卒業生は中学校1年次の授業においてどうしても既に学習していることをもう一度やる場面がでてしまう。(既に学習したことが全て身につけているわけではないが)その分、公立小学校卒業生の学力が追いついていくのであろう。もしそれぞれの進捗状況に合った授業展開があればまた違った結果になったことも考えられる。

③ 習熟度別授業の必要性

4月に行った学力試験からわかることは中学校入学以前で生徒たちの学習到達度の差が大きくなっていることである。そのため、通常のクラスで授業を行ってしまうと、小学校で習ってきた生徒は退屈なものになり、習ってきていない生徒は進度が早くてもついていけないということが多くなってしまう。また入学後における理解度や習熟度の違いに合わせた展開を考え、中学校に入学したときの学習量で習熟度別にグループを編成し、それぞれカリキュラムの異なる授業を展開していくこととした。分け方については、上位グループ(本校ではBグレードと呼んでいる)が本校小学校課程卒業生及び小学校での学習を2年間以上続けてきた生徒、下位グループ(本校ではAグレードと呼んでいる)は学習の経験がない生徒及び小学校での学習が2年未満の生徒ということ为原则とした。このシステムは以前より本校が採用していたものではあるが、ここ数年、上位層と下位層の差が広がりつつある。平成23年度より小学校で英語の授業が必修化してもその傾向は続くと思われるし、さらなる格差も視野に入れる必要がある。

上位グループでは、小学校であまり学習してこなかった文字と音を一致させることや文法の知識をしっかりと中学校で身につけさせるために教科書を最大限に有効に活用していくことが必要である。また文法や語彙の知識があってもそれを十分に使いこなせるのとは別であり、自然に英語を口にできるようにさせる必要がある。例えば、本文に関する内容の絵を見せて、自由に会話をさせることなどの活動をペアワークとしてさせ、同時に論理的な思考を育てる、英語の表現力をつけさせることなどが有効であると考えられる。

下位グループでは上位グループのような活動をさせるために基本となる英文の形をよく定着させていく必要がある。英語で表現する際に日本語をベースとして考える傾向がより強いいため、英語特有のテンプレートを定着させていく必要がある。

もちろんそれぞれのグループでも依然として学力の差はあり、人数も多いためその分生徒一人一人が発言する機会は少なくなり、時間もかかってしまう。理想としては上位、中位、下位の3グループに分け、それぞれのグループの人数を少なくして授業を行うことが望ましい。(本校では平成23年度より3グループ制実施予定)

④ 英語を話す力と模擬試験などのペーパーテストによる学力との関連性

1 [仮説設定]

現状から推察するに話す力がこれまでより高い生徒が今後多く入学してくることが予想される。ゆえにその力を伸ばす取り組みは必要である。しかしながら今日の英語教育における大学受験を視野に入れなければならないという側面も無視できない。この2点を同程度重要視するには、それらの関連性について検証してみる必要があるだろう。そこで、いわゆる模擬試験などのペーパーテストで高得点をとる上で必要とされる知識・理解が、生徒自らが英語で表現することの礎を作り、生徒が能動的に表現したものを教師がフィードバックすることによって新たな知識・理解を深めることにつながるかもしれないと考え、次の仮説を立てた。

研究仮説

英語を「話す力」に重点をおいて授業を行っていけば、聞く力、読む力、書く力を高められ、それによって模擬試験などのペーパーテストの成績の向上にもつながるだろう。

研究仮説設定の背景

ここでの「話す力」とは、単に書いたものを読んだり、学習した特定文法事項を使って文章をつくるというレベルを言っているのではない。絵や写真などを用いて、場面設定をしつつ様々な課題を与えることによって、その場で英文を構成し、発言していくことである。これは長年多くの日本人が苦勞してきことではないだろうか。現行の英語教育ではその実施が難しかったが、早期英語教育でその面に重点がおく教育がなされていることで中学校英語でも研究仮説が現実可能になると考える。

一般的には学校で用いられているスピーキングテストの種類と特徴を、事前に準備をして臨むもの(レシテーション、スピーチ、スキットなど)と、相手との即興のやりとりがあるもの(ロールプレイ、インタビュー、ディスカッションなど)に大別される。そこで現在の中学1年生には前者のような取り組みをさせながら、スピー

キング力に必要な知識、技術を養わせながら、後者のように即興でやりとりできる力を付けさせたいと考え、最終的にスピーキングテストをすることで生徒の力を測った。そしてそれを用いてスピーキングテストと模擬試験の関係について調べることにした。

2 [実践より]

(1) 話す力を意識した授業

授業におけるスピーキング力向上のための実践例として、ディクトグロスやストーリーリテリング、絵から物語をつくる活動などを多くの教材を実践した。

(2) スピーキングテストの実施するにあたって

一斉授業をする上で最も評価しづらく、4技能のうち、定期試験や模擬試験で点数化されないのがこの「話す力」である。そのため試験で良い結果を求めるのなら、既習の語彙、文法を用いて、「話す」以外の3技能を練習させることが多い。しかし「話す」ことをベースとした方がより実践的に他の3技能を向上させていくことが可能であると考えている。これはとりもなおさず今日求められている「使える英語」を習得させていくことが可能であると考えた。

ア) 実施の時期

中学校で習う文法事項の学習が一通り終わる頃である2月上旬に実施した。

イ) 試験方法

上位グループの34名の生徒が1人ずつ廊下にて面接官と1対1で試験を行うこととした。1人あたり5分程度で終了する試験内容とし、研究者と外国人教師と手分けして行い、2時間分の授業時間の中で行った。生徒の前にICレコーダーを置き、全て録音することで試験後に発話内容を再確認し、より細かい評価とフィードバックすることができるようにした。

ウ) 試験内容

- ① 英文の音読
- ② 描かれている絵に関する状況の説明(理由、結果を含む複文をつくる)
- ③ 応答問題(オープンクエスション)
- ④ ロールプレイ(提示された状況の中で試験官と会話をする。)
- ⑤ 疑問文の作成(必要な情報を得るための疑問文をつくる。)

(3) 学力試験について

スピーキングテストとほぼ同時期(2月上旬)に2010年度第3回学力推移調査(ベネッセ)を受験させた。これは主に私立中高一貫校の生徒が受験し、試験内容はリスニング、語彙・文法、文構成、会話文、長文読解、英作文の6つから構成されている。全国平均点は例年50点前後である。

(4) スピーキングテストの結果と学力試験(学力推移調査)結果との比較

スピーキングテストの平均点: 65.1点 第3回学力推移調査(ベネッセ)の平均点: 55.3点

スピーキングテストと第3回全国学力推移調査(ベネッセ)との比較

スピーキングテストのスコア	人数	第3回学力推移試験の平均点
80点以上	8人	69.3点
68点~79点	8人	57.1点
56点~67点	13人	49.8点
55点以下	5人	44.0点

3 [考察]

スピーキングテストのスコアを4段階に分類し、分類されたそれぞれの生徒が学力推移調査でとった点数を平均すると、スピーキングテストのスコアが高い生徒ほど学力推移調査でも高い点数をとる傾向にあることがわかった。よってスピーキングテストがペーパーテストに大きく影響していることがわかる。しかし一人一人の成績を見るとスピーキングテストと学力推移調査のスコアが必ずしも比例するものではないことも見える。

その理由は

- ① 話すことはできてもスペルミスによってペーパーテストでは正解とならなかったり、減点となるケースがよくあること。
- ② ペーパーテストで高得点を取るための技術が別に必要であること(リスニングでメモを取る訓練や、読解問題における選択肢の選び方など)

が考えられる。

またスピーキングテスト自体の平均点は予想していたよりも低く、文法的なエラー、特に時制におけるエラー

の頻度が高かったため高得点に結びつかず、当然そのエラーは学力推移調査の解答にもよく見られた。学力推移調査の誤答を分析しつつ、生徒に解説をしたときに気付いたことは、生徒たちの発言として、「あ、そうだった」が多かった。つまり、頭では分かっているでもそれを十分に使いこなせる力が身につけていないということである。その点においてスピーキング活動はその絶好の機会であると考え、その回数を増やしていく必要性が強く感じられる。(これはスピーキングテストを一回行うだけでは模擬試験の平均点アップにつながっていないという結果からもいえることである。)

スピーキングテストを実施した後の生徒の感想からは「かなり緊張した」「正しく話すことができなかったことが本当に悔しい」(よくできた生徒からは「すごく難しかったけれど、その分言えたときはとても気持ちが良かった」という回答もあった)というものがかなり多かった。そこから見えてくることは、

- ① このテストがかなり緊張感のある、かつオーセンティックなものでコミュニケーション能力を存分に発揮するいい訓練になること。
- ② 多くの生徒が「英語を話せるようになりたい、話せたらカッコいい」という一種の憧れを抱いていること。
- ③ その分テストの出来による喜びと悔しさがペーパーテスト以上であり、それが文法や語彙を勉強する強いモチベーションになること。

などが挙げられた。

スピーキングテストを実施する上で忘れてはならないことは以下のことである。

- ① 点数を算出する以上、採点基準を生徒に提示すること。そうしないと何を求められているのかが曖昧になり、不公平なテストととられかねない。
- ② 実施後必ずフィードバックをすることである。正解となる解答例を示したり、生徒たちが発言した内容に適切なアドバイスをすることで今後の実力アップにつなげていかなければならない。

4 [スピーキングテストの課題]

- ① スピーキングテストの評価基準を設定してはいるものの、多かれ少なかれ主観的な判断が含まれ、採点者によって点数が一致しない可能性があるため、教員側も訓練が必要であること、また評価基準そのものもまだまだ改善の余地があること。
- ② スピーキングテストの実施回数を増やすためには時間的により効率的な方法が求められること。例えば音読やQ&Aなどの設問はマイク付きヘッドフォンを用いてパソコンに一斉に録音させ、ロールプレイなど個別の対話が必要な設問のみ IC レコーダーに録音して一人一人対応するといった試験時間の短縮を図ることが必要である。

まとめ

今後小学校英語教育で様々な言語活動が行われ、一定のコミュニケーション能力の素地をもって中学校に入学してくる生徒が多くなっていくであろう。しかし小学校の英語教育もスタートしたばかりであり、それぞれの小学校によって授業の内容、質、量ともに差があることが予想できる。その現状で中学校入学後、それぞれの生徒が学習意欲を高めるためには、それぞれの生徒のレベルに合った授業を展開できる習熟度別授業編成は必要不可欠である。その生徒たちをさらに伸ばしていくためには、中学校英語教育ではスピーキング活動により力を入れながら、生徒たちが表現できる幅を広げさせると同時に、その目的として必要な語彙、文法を学ぶというスタイルが必要であると考え。その学習到達度を測るため、知識を得るモチベーションを高めさせるためにスピーキングテストは重要な役割を果たすであろう。

昔から耳にすることは、小学校から英語を勉強し始めているが高校に入る時点で学力が十分についていないという生徒が多いことである。それは小・中・高での学習スタイルに大きなギャップがあり、そのギャップについていけないからではないかと推測する。その意味で小学校から高校へとつなげていく中学校英語の役割は大きい。その最大の焦点は中学校におけるスピーキング能力開発である。

ここで近年 TOEIC SW のように英語のスピーキング技能を判定するテストが多く開発されており、仮に大学側が筆記試験以外にそのような資格試験の受験を求めれば、大学受験対策に偏りがちな高校英語においてもスピーキング活動が活発になっていくと予測できる。そうなれば小学校～中学校英語が生き、俗に言う「英語の使える日本人」を増やすことの一助となるであろう。

参考文献

- 今井裕之・吉田達弘 (2007) HOPE 中高生のための英語スピーキングテスト 教育出版
 斎藤栄二 (2008) 自己表現力をつける英語の授業 三省堂
 William A. Vance (2009) 英語で考えるスピーキング ダイアモンド社